

キューピーとは(その 3)

これまでキューピーについて、どのようにして生まれたか、どのような特徴があるかなどを書いてきました。今回は、その後キューピーがどのようにになっていったかを述べていくことといたします。

キューピーは、その後一人歩きをしていきます。おもちゃのマーチ、キューピーさん、キューピー・ピーちゃん、わたしのキューピーさんといった歌が次々に発表されました。中には一銭五厘のキューピーさんという徴兵検査を思わせる歌がゴム飛び遊びの時に歌われたりもしました。

1919年に創立された中島葦商店がキューピーを会社の登録商標としたのは3年後からでした。今では社名そのものがキューピーとなっているのは御存じのことと思います。

この他にもキューピーは絵葉書や年賀状などにも用いられて誰もが知る存在となりました。当時は今ほど商標や意匠に関する著作権が確立していなかったのが幸いしたのです。

そして何よりも大きな存在がセルロイドキューピーです。



左上にあるキューピーは、大きさも表情も様々です。葛飾区を中心とする一帯に存在した成型を行うセルや、着色する彩色やが、それぞれの個性を出そうとしたために特徴あるものとなって、右上のローズ・オニールタイプとはまた違った親しみのある感じが出ています。サロンではお馴染みの林扶美子も彩色やで、このようなキューピーを色つけしていたのでしょう。

大正から昭和にかけての日本はまさにキューピーブームでした。前述のように歌が出来る、様々な玩具が出来る、年賀状や絵葉書となる。そしてセルロイドキューピーは、駄菓子屋でも売られたので子供達の誰もがもっているという国民的キャラクターとなりました。



⑤ 女の子
昭和戦前 (1930s)
39 × 12.5 × 8 cm
Girl



そのため他の人形までキューピーの影響を受けるようになり、上記の人形のようにどことなく似ているものが作られるようになりました。

このブームは戦後まで続いて **Made In Occupied Japan**(占領下の日本製)の刻印が押されたキューピー人形が大量にアメリカに輸出され、代わりに食糧が入ってきて日本人の空腹を満たしたのです。さらにセルロイドから塩化ビニールをはじめとする各種プラスチックに変わってもキューピーの人気は不動でした。

人気キャラクターにはミッキーマウス、ドナルドダック、ポパイ、鉄腕アトム、ウルトラマンなどがありますが、キューピーほど長い間、世界中で親しまれたものはありません。恐らくこれから先も子供達だけでなく大人にも愛され続けることでしょう。